よだかは、実にみにくい鳥です。

　顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、

くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。

　足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。

　ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやに

なってしまうという工合でした。

　たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさもいやそうに、しんねりと目を

つぶりながら、首をそっ方ぽへ向けるのでした。

もっとちいさなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかの

まっこうから悪口をしました。

「ヘン。又出て来たね。まあ、あのざまをごらん。

ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしだよ。」

「ね、まあ、あのくちのおおきいことさ。きっと、かえるの親類か何かなんだよ。」

　こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生はんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでもかくれたでしょう。ところが夜だかは、

ほんとうは鷹の兄弟でも親類でもありませんでした。

かえって、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂すずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜をたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとってたべるの

でした。それによだかには、するどい爪もするどいくちばしもありませんでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかを

こわがる筈はなかったのです。

　それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗に強くて、

風を切って翔るときなどは、まるで鷹のように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた為です。もちろん、鷹は、これをひじょうに気にかけて、

いやがっていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩をいからせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためろと、いうのでした。

　ある夕方、とうとう、鷹がよだかのうちへやって参り

ました。

「おい。居るかい。まだお前は名前をかえないのか。

ずいぶんお前も恥知らずだな。お前とおれでは、よっぽど

人格がちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまででも飛んで行く。おまえは、曇ってうすぐらい日か、

夜でなくちゃ、出て来ない。

<よだかの星>　作　宮沢賢治

9
pt

游明朝体　本文＋引用先